

大学教育開発センター通信

WINTER
Vol.14
2007



第2回龍谷大学FDフォーラム

- テーマ
「授業評価と大学改革 ～評価文化を基礎とした大学教育の発展～」
- シンポジウムテーマ
「授業評価と大学改革とのあり方」

※FDフォーラムの開催概要はp2～p3をご覧ください。

C O N T E N T S

特集1	大学教育開発センターの取り組み	2
	①第2回龍谷大学FDフォーラム	
	第2回龍谷大学FDフォーラムを開催して 岡地勝二(大学教育開発センター長)	
	参加者の声 藤原 学 (FDフォーラム実行委員・理工学部教授)	
	平野 武 (法学部教授)／長上深雪 (社会学部教授)	
	②公開授業と講評会	4
	公開授業を終えて 中川孝博 (法学部教授)	
	参加者の声 若林三奈 (法学部助教授)	
	担当教員がしゃべらなくても公開授業? 樋口三郎 (理工学部講師)	
	参加者の声 宮下豊勝 (理工学部教授)	
特集2	情報メディアセンターの取り組み～ICTを活用した授業の事例紹介～	6
	教室での授業を支援するCMS～OCW+Moodleの利用～ 藤田和弘 (理工学部助教授)	
FD活動紹介		8
	「文学部教育改革のためのアンケート」集計結果について 長谷川岳史 (文学部助教授)	
	理工学部におけるFDの取り組み 林 久夫 (理工学部教授)	
学生による授業評価調査(授業アンケート)		10
	第1学期 実施状況について	
お知らせ	パソコン講習会・2006年度活動報告	11
	2006年度指定プロジェクト・自己応募プロジェクト研究報告会	12
	2006年度現代GPシンポジウム(短期大学部主催)	
	第12回FDフォーラム(大学コンソーシアム京都主催)	
	新着図書	



大学教育開発センター通信 第14号

■発行日: 2007年1月31日

■編集・発行: 龍谷大学 大学教育開発センター
〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
TEL (075) 645-2163 FAX (075) 645-2190
<http://www.ryukoku.ac.jp/fd>

■発行責任者: 岡地勝二

第2回龍谷大学FDフォーラム

第2回龍谷大学FDフォーラムを開催して

大学教育開発センター長 岡地 勝二

龍谷大学大学教育開発センターは、12月2日に第2回の龍谷大学FDフォーラムを開催しました。このフォーラムには、基調講演者として独立行政法人大学評価・学位授与機構理事の川口昭彦先生をお迎えして、さらにシンポジストとして圓月勝博先生（同志社大学）、大塚雄作先生（京都大学）、そして宇佐見義尚先生（亜細亜大学）の3人をお招きして、「授業評価と大学改革」というテーマのもとに議論を重ねました。

現在、世界的に高等教育における学力低下の問題が共通問題として産業人、大学人の間で議論されるようになったのは周知の事実であります。それは、いかなる国といえども、経済の発展は物理的な資本だけでなく、人的な資本の充実をなくしてはありえない、という認識が極めて常識になってきたからだと考えられます。さらに、世界的に見られる共通な認識としては、大学は、社会の一員として十分に社会的責任を果たしていかなければならない義務がある、というものが考えられます。このような見解にたつて、大学は以前にもまして教育の質的な充実をはかり、より有為な人材を社会に送り出すことが義務づけられるようになりました。

その問題を解決する大きな方法としては、各大学における授業の改善が急務だと考えるようになりました。しかし、授業の改善とは何か、さらに授業を改善するためにはどのような基本的な認識を教員は持つ必要があるの



か、などについては大変難しい問題であるように思われます。一般に授業を改善するためには、授業評価が必要だとも言われますが、その授業評価のあり方についても更なる厳密な議論の構築が必要になってくるものと思われます。そのような見地からこのフォーラムで専門家によって授業評価のあり方について議論しあえたのは極めて有意義であったと考えます。

なお、このフォーラムを開催するにあたりまして、たくさんの方々にお世話になりました。ここに記して感謝の意を表したいと思います。

◆参加者の声

理工学部 藤原 学

法学部 平野 武

社会学部 長上深雪

FDフォーラムから得たもの

FDフォーラム実行委員
理工学部教授 藤原 学

神子下恵群学長による開会ご挨拶の後の基調講演者は、大学評価・学位授与機構理事の川口昭彦先生でした。基調講演のテーマは「授業評価と大学改革 ～評価文化を基礎とした大学教育の発展～」であり、まことに時機にかなったテーマでした。川口先生は、以前は東京大学教養学部教授で生命科学がご専門だったそうですが、2000年より所属を移られFDの普及に努められております。今回のテーマに関連した講演を全国各地で行われているようです。評価というのとはもともとアングロサクソンの文化であるが、日本の大学の国際化に結びついて現代ではそれを受入れなければならないと論じられました。評価文化を基礎として社会に開かれた大学が21世紀の大学であり、それに所属する大学人に求められる能力は「社会との接点から情報を的確に把握しそれらを評価する（聞

く能力）」「厳正な自己評価を実施する（受け止める能力）」「大学に対する様々な外圧や批判に対して説得力のある言葉で反論する（発信する能力）」「自らの改革を実行する」ことであると明示されました。全国の大学におけるFD活動の具体的な例を数多く紹介され、力強く述べられた言葉はそれぞれの参加者の心にしっかりと届いたように感じました。最後に「大学改革の最重要課題は、教員と学生の意識改革である」「最近の大学における必修科目の減少、選択科目の増加は、学生の意識改革を求めている」と述べられ、学生の意欲を喚起しFDを進展させるひとつの道すじを示されたのではないかと思います。

休憩をはさんで、川口先生の他に同志社大学教育開発センター所長の圓月勝博先生、京都大学高等教育研究開発推進センター教授の大塚雄作先生、亜細亜大学経済学部助教授の宇佐見義尚先生を加えてシンポジウムが開かれました。最初に3人の先生方の「授業評価と大学改革」についてそれぞれの大学における事例報告がなされました。学生における授業アンケートの実施の工夫とその結

果をどのように利用しているかなどが紹介されました。どこでも問題となる、アンケート採取時期と回数、アンケート結果の公表、記名か無記名かなどについては、参加者からも質問がでました。クラス規模、科目の属性（専門科目か教養科目か、必修か選択か、講義か演習か、受講生の学年など）によって最もよい方法が異なるため、大学全体で一つの方法でアンケートをとることの難しさはよくわかります。それでも、「継続は力なり～興味ある結果を得るためには、継続して結果を集計する必要がある」「当たり前結果でも、点数で示されると力になる」

と示されたこともまた真実なのでしょう。講演された先生方からの「わかりやすい授業が良い授業か?」「授業への集中度を高めるためには?」などの問いかけは、本当に良い授業とはどのようなものか考えるきっかけとなりました。授業改善は容易ではなくカリキュラムの視点からの改善が肝要であることや、大学人にとっての永遠の課題である「授業」を一つの研究（学び）の対象にしていくこと、そして授業研究するFD共同体の形成の重要性などを聞かせていただき、本当に有意義でした。

中間授業アンケート(授業評価)について

法学部教授 平野 武

龍谷大学で学生による授業アンケート(授業評価)を導入してから10数年経過しました。学生による授業評価の導入に際しては抵抗もありましたが、今日、一応定着したといえます。しかし、このような授業評価については、現在、マンネリ化や成果の点でいくつかの疑問も生じています。このことに関連して、今回、第2回龍谷大学FDフォーラムに参加する中で感じたところを述べてみます。

授業評価は授業改善に繋がらなければ意味がありません。授業評価は儀式ではないし、比較の材料や統計的に有用なデータを得ることが第一の目標でもありません。授業評価は現実の授業の改善に具体的に役立つようなものでなければなりません。その点を重視して授業の規模、授業の形態等に即した評価方式を考えるべきです。検討すべきことは多々ありますが、ここでは中間授業アンケートについてのみ述べます。今回のFDフォーラムでも授業の中間での実施の例が報告されていましたが、実は、私も、今年、「生命倫理と法」という授業で初めて中間授業アンケートを実施してみました。私の今年の実験的施行は某医大で行ったもの（正確に言うとその大学では

実施が制度化・義務化されています。なお、そこでのアンケートは記名式でした）を下敷きにしています。龍谷大学の場合は無記名方式で行いましたが、それは匿名の方が自由で率直な意見が反映され则认为たからです。中間授業アンケートが意味あるものと考えられるのは、いうまでもなくそこで得られた結果がその期の授業の改善に直に生かすことができ、学生に還元されるからです。最終授業での評価の場合、それが生かされるのは次期のセメスター、あるいは次年度です。しかし、そのときには教員の側にどれだけインセンティブが持続しているかが疑問です。また、受講学生の立場からしても、自分に還元されないとアンケート・評価に熱意をもたないでしょう。

中間授業アンケート実施に際して問題となるのはサポート体制です。今回の龍谷大学での実験も幸い少人数規模であったから自分で処理できましたが、大規模授業となると、実施を支える体制（例えばOCR）が必要となります。中間授業アンケートを気軽に行うためには、アンケートの項目を整理して簡便な形式で実施すべきです。一方、そのこととは矛盾するようですが、それぞれの教員が聞きたいと思うことを自由に加えてよりカスタマイズしてもいいのではないかと思います。私自身は、今年の経験を踏まえて来年も中間授業アンケートを行うつもりです。

FDとしての授業評価について

社会学部教授 長上 深雪

「授業評価と大学改革」のテーマで開催されたこのFDフォーラムは、大学における「授業評価」の意味を改めて問いかけるものとなりました。

フォーラムでの指摘のとおり、「授業評価」は一つのツールにすぎず、まずもって大学における教育課題を明確にすることが必要です。課題に対応して対策があることは至極当然のことながら、評価ばやりの昨今、授業評価を実施することが目的化し、その方法のみが一人歩きしている面もあるように思えてなりません。評価の方法や対象は目的に規定されるのであり、そこに大きく調査者と被調査者の社会関係が反映することはいうまでもありません。

さらに、FDとしての授業評価に関して言えば「評価者として」学生をどう育てるか、といった点は重要です。これは、授業評価の目標とも大いに関わります。「何のための授業評価か」は論を待たないにしても、その目的のために現在の授業アンケートを中心にした方法が最善

のものかといえそうとも言い切れません。また、多大な費用と手間暇をかけたアンケートの結果が活用されているかといえ、それは担当教員レベルにとどまっているのが現状でしょう。大学改革という点から考えるならば、個々の授業評価と大学全体の教育評価を結びつけてこそ大学改革へとつながるのではないのでしょうか。そのためには、FDの中心に教育論議こそ置くべきであり、何をどう教育するか、すなわち教育内容と教育水準、それを具体的な教育におとしこむ活動である個々の授業とその体系にかかわる問題を真正面にすえた議論が不可欠です。

教育のむずかしさは効果がすぐに表れないところにもあります。また組織的・集团的取り組みであるがゆえに、その組織のあり方や教育集团としての力量も反映します。効果を数値でリアルタイムに測定できないからこそ、教育目標の明確化が重要であり、集团的な営みであるからゆえに、明確化された目標の共有化が急がれるのではないのでしょうか。京都大学の大塚氏の「学問学習共同体の形成」といった指摘に学んだ次第です。FDフォーラムに参加して、あらためて本質論の重要性を認識しました。

公開授業と講評会

公開授業を終えて

法学部教授 中川 孝博

1年次教育の改革が全学的課題となっている今日のごろです。私たち研究者は、授業に関しては実務家です。様々な外在的事情に翻弄されつつもより良い授業に向けて努力を続けねばならないという点では、小中高の教員と変わりません。

今回の授業は「刑事法入門」です。学生を自主的学習に誘うべく、毎回あれこれ試みています。今回はミニ・ディベートを前半に行いました。この科目は法学部1回生の履修指導科目であり、学生のほぼ全員（98.5%）が履修しています。法学部1回生は基礎演習もまた履修していますから、演習クラス単位で本授業の課題を出すな



12月15日（金）2講時 「刑事法入門」（深草学舎21号館603教室）
公開授業の前半にミニ・ディベートが行われた（中央：中川教授）。

ど、組織的試みがかなり容易な環境にあります。ですから、ディベート大会を企画・実行することも難なくできました。演習クラスごとに代表者を選出しておいてもらったのです。

学生には、「あまり準備してくるな」と言っておきました。今回とりあげたテーマについては、問題の本質がわかるような書き方がしてある学生用マテリアルはほとんどなく、準備をしようと思って図書館に入っても、よくわからないまま資料を丸写ししてくるのが関の山でしょう。今回のディベートの目的は、彼らの素朴な感覚による判断を引出すこと、そして、後半の授業における私の解説講義において、彼らの感覚的判断と刑法学上の理論を結びつけ、理解を容易にするという点にもあったのです。

結果はどうだったのでしょうか。講評会では、「クラス・コントロールがよく効いている（私語が少ない、みんな教科書を開いて熱心に勉強している等）」、「1回生の段階でこんなに元気に意見表明ができることに驚いた」等の意見が寄せられました。授業方法を工夫した甲斐があったというものです。

もっとも、「ディベートの途中で心がゆるんできた聴衆が出てきたようだ。教員による後半の講義のほうが熱心に聴いていた」等の声もありました。講義を熱心に聴いてくれたのは、今回のしかけが奏効したせいでしょう（さもないとちぶんかんぶん、集中が続かないテーマだったのです）。しかし、ディベートの途中で心をゆるませてしまったのは問題です。ディベートのテーマの出し方にもう一工夫必要ようです。

公開授業参加者の声

法学部助教授 若林 三奈

まず具体的なケースを提示した上で、その結果の是非について学生によるディベートという手法を通じて、続く、抽象的な理論をめぐる講義の理解において重要となるキーワードを、学生自身に、彼ら自身の日常の言葉で語らせる。このような形で、講義の理解を容易にし、知識を「ものにさせていく」手法は、参加した教員にとっても、非常に刺激的であり、興味深く拝見させていただきました。

もちろんこれは、教員の一方的な講義という従来の教授方

法に比べれば、「非効率的」ともいえます。それゆえに、このような講義手法に魅力は感じつつも、現実には、ただでさえ「講義時間が足りない」と感じている、自身が担当する科目（非入門科目）に、直ちに転用できるかという難しい面も感じました。とはいえ、反面、果たして、現在の講義科目における教授内容の質量が適正なのか、ということを考えるきっかけにもなりました。

いずれにせよ、大講義にあっても「参加型授業」が可能であること、そして、結果として、学生にときに難解で退屈な理論を学ぶ目的・意義を明確にし、そのことが学生の学習意欲を高めることに成功しているように思えたのは収穫でした。

担当教員がしゃべらなくても公開授業？

理工学部講師 樋口 三郎

微積分・演習は、演習つき講義という形態の科目です。週に1講時は主に担当教員が語る講義、もう1講時は受講者が（正解の定まった）問題を解いたり大学院生TAが黒板で解説したりする演習の計2講時があります。

受講者が科目内容の理解を深めるために演習は不可欠なのですが、その運用には多くの悩ましい点があります。例えば、TAの方々に（出席していない）講義の様子をどう伝えるか、講義に出席せず演習だけに出席した受講者にどう対応するか、時間が不足して解説できない問題の解答を公開するか、などです。

今回の公開授業では、演習の実施方法、授業時間外でのTAとの連絡や情報共有の方法などを見ていただきたいと考えました。このため、公開授業とはいいいながら、90分のうち担当教員の樋口が生でしゃべっているのは10分程度でした。

◎公開授業の実際

9:20～大教室セッション

全受講者とTAが一つの教室に集まり、受講者が10分程度で小さな1つの問題（quiz）を解きます。TAはその間に、前回のquizの解答状況を個人別にチェックします。その後、担当教員が10分程度の解説を行います。今回の内容の典型的な問題を受講者とTAが共有し、受講者が自分の理解度を認識することがquizの目的です。



公開授業後に行われた講評会。



12月21日（木）1講時 「微積分・演習」（瀬田学舎2号館219講義室）小教室での様子（右：樋口講師）。

9:40～小教室セッション

TA9名受講者160名が、TA2名受講者約38名ごとに分かれて小教室に移動します。前回のquizの採点結果を材料にTAが各受講者の疑問点を確認します。その後、受講者はあらかじめ配布してある演習問題を解き、TAは質問に答えたり、解説したりします。公開授業参加者には、担当教員の参加した小教室を中心に、すべての小教室を自由に見てまわっていただきました。

10:10～講義ビデオ視聴

公開授業参加者には、最後の30分程度に、同じ週の講義のビデオ（情報メディアセンターが学内に公開しているもの）を見ていただきました。

◎終わりに

公開授業中および講評会を通じて、参加された教員の方々からたいへん勉強になるコメントをいただきました。また、大学教育開発センターと情報メディアセンターの職員の方々にはご尽力いただきました。どうもありがとうございました。

後から思ったのですが、問題の当事者であるTAの方々や受講者の方々にも講評会への出席をお願いしてもよかったのかもしれません。

なお、講義のWebページ

<http://www.math.ryukoku.ac.jp/~hig/calculus/>に、公開授業の参加者や受講者に配布した資料などを置いています。ご参照ください。

公開授業参加者の声

理工学部教授 宮下 豊勝

最初に、公開授業をして下さった樋口先生にお礼を申し上げます。

どの学科でも数学系の演習は同様と思いますが、元々ゆとり教育と多様な入学形態のため理数系の学習訓練が不十分である理工学部の学生が多くなっているのに加えて、全入学時代を迎えて、専門科目の履修に必要な算数と数学を導入教育でいかに身につけさせるかが、今日の最大の課題になっていると言っても過言でないと思います。この授業におけるように、

個々の学生に合った演習をさせるためにはTAが必要となります。しかし、その運用がまた課題です。模範解答を黒板でして見せる、解らないで困っている学生にヒントや助言を与える。ここまでは、この公開授業において良くできていると思いました。ところが実を言うと、この演習の時間には解答としては格好が付いてできているのですが、他の講義で活かせるまで理解できているか？いつも卒業研究を含め専門科目の講義において悩まされています。また、学生同士が刺激し合う演習形態は？学生から積極的に先生やTAに質問するようにならないものか？多くの教員が授業公開に参加すれば、こんな課題に対する解決の糸口がつかめないものかと痛感しました。残念ながら参加者は少なかった。

ICTを活用した授業の事例紹介

教育へのICT（情報コミュニケーション技術）の活用は、教育内容を高度化・豊富化するとともに学生の理解度向上や予習・復習などの授業時間外における学習支援の充実に寄与することが期待されています。また、こうした活用を通じて、授業時間に限らず教室以外での学生とのコミュニケーションを図ることにより対面授業の補完や強化を図ることも可能となります。

今回の事例紹介では、一般的な板書を主体とした授業形態に加え、情報メディアセンターが授業支援の一つとして試行運用中のeラーニングシステム（CMSはオープンソースのMoodle）を授業の一部に取り入れるなど、多様な組み合わせにより授業を実践されている理工学部情報メディア学科の藤田先生にご寄稿いただきました。

教室での授業を支援するCMS ～OCW+Moodleの利用～

理工学部助教授 藤田 和弘

龍谷大学に、平成16年10月1日に赴任してようやく2年が過ぎました。龍谷大学での授業の仕方について悩むことが多く、その中で実践と私が考える大学の授業、特にICTを利用した授業について、ここにまとめたいと思います。

1. 前任校京都工芸繊維大学での情報化

前任校の京都工芸繊維大学で、大学の情報化と教育の情報化の仕事をしていましたので、まず、それについてご紹介することで、私のICTを利用した授業等に対するバックグラウンドを示したいと思います。

私は、情報科学センターの専任教員、また、情報化推進委員会の専門部会委員として、大学全体の情報化の構想を練るとともに、具体的な実践を行っていました。

大学自体の情報化の取り組みとしては、
◎事務局を中心としたWebグループウェア

教育の情報化の取り組みとしては、
◎工科系大学教育連携協議会での大学院遠隔授業
◎ALC NetAcademyによる英語の自学自習システム

などを実践していました。

工科系大学教育連携協議会には、北見工業大学、室蘭工業大学、電気通信大学、東京農工大学、東京工業大学、長岡技術科学大学、北陸先端科学技術大学院大学、豊橋技術科学大学、名古屋工業大学、京都工芸繊維大学、奈良先端科学技術大学院大学、九州工業大学の工科系12大学が参加し、平成15年4月より、大学院生を対象とした遠隔授業を実施、教育内容の拡充を行っていて、実際に単位発行をしていました。京都工芸繊維大学でも、「画像工学特論」（中森教授担当）を提供していました。この科目を提供する上で、CMSとしてBlackboardを導入し、以下のような授業支援を行っていました。

- ◎シラバスの提供
- ◎授業のお知らせの提供
- ◎授業の資料の提供
- ◎レポート課題の提示
- ◎設問による授業内容の理解度のチェック
- ◎受講状況の確認

また、多様なメディアを一体として提供する授業コンテンツとしては、MicrosoftのProducerで作成したマルチメディアコンテンツを、Microsoft IISとMicrosoft

Media Serverを利用して、インターネット経由でストリーム配信していました。

2. e-Learning

いわゆるe-Learningによる授業は、大学設置基準第25条を根拠としています。

第25条 授業は、講義、演習、実験、実習若しくは実技のいずれかにより又はこれらの併用により行うものとする。

2 大学は、文部科学大臣が別に定めるところにより、前項の授業を、多様なメディアを高度に利用して、当該授業を行う教室以外の場所で履修させることができる。

3 大学は、第1項の授業を、外国において履修させることができる。前項の規定により、多様なメディアを高度に利用して、当該授業を行う教室以外の場所で履修させる場合についても、同様とする。

この別途定めるといのは、文部科学省告示第51号（平成13年3月30日）により規定されています。

通信衛星、光ファイバ等を用いることにより、多様なメディアを高度に利用して、文字、音声、静止画、動画等の多様な情報を一体的に扱うもので、次に掲げるいずれかの要件を満たし、大学において、大学設置基準第25条第1項に規定する面接授業に相当する教育効果を有すると認めたものであること。

- 1 同時かつ双方向に行われるものであって、かつ、授業を行う教室等以外の教室、研究室又はこれらに準ずる場所において履修させるもの
- 2 毎回の授業の実施に当たって設問解答、添削指導、質疑応答等による指導を併せ行うものであって、かつ、当該授業に関する学生の意見の交換の機会が確保されているもの

このような法令の関係で、e-Learningといえ、Distance LearningやOndemand Learningと考える人が多いように思います。

最近、私は、このようないわゆるメディアを利用して行う授業よりも、もっと教室で行う授業に対して、ICTを利用すべきだと思っています。

3. 教室での授業

教室での授業の単位の根拠となる法令は、大学設置基準第21条であり、これには、45時間の学修を必要とする

内容をもって構成することとなっています。以前のように「教室外における2時間の準備のための学修」を考慮する必要性が残っていると思っています。そのためには、文部科学省告示第51号にある面接授業に相当する効果を考えると、設問解答、質疑応答、意見交換の機会を確保する必要があり、そのためにこそ、CMS (Course Management System) を利用すべきであると考えます。

また、FDとしても、教室での授業を改善する一方法として、CMSによる授業支援を考慮すべきであると考えます。

では、CMSを利用した教室での授業はどうなるかですが、これについては、以下のような要素を考えています。

- ◎教材の提示→学生の予習の促進
- ◎毎回の授業後の設問（小テスト）→学生自身による理解度の確認、復習
- ◎レポート課題の提示、受付

これらにより、教室外での学習を担保するという考えです。

また、教師の教育活動の支援としては、

- ◎学生の学修状況の把握
- ◎小テストの成績などの整理
- ◎教材、小テスト、レポート課題のuploadによるコースパケットの生成

などを挙げることができると思います。特に、最後のコースパケットの生成は、整理ぎらいの私にはとても便利な二次的な機能であると思っています。

4. OCWとMoodleによる授業実践

龍谷大学に赴任してからは、以下のような複数の授業形態を試行しています。

- ◎教科書をもとに、板書を主体とした授業
- ◎OHPとCMSを主体とした授業
- ◎ノートをもとに、板書を主体とした授業

ここでは、2番目のOHPとCMSを主体とした授業「デジタル信号処理」について、報告します。

教育の質の保証という観点からMIT OpenCourseWareのSignals and SystemsのLecture Noteを利用して、MITレベルの授業を、スピードを落として復習を頻繁に行いながら行いたいと思ったのが、この授業形態をはじめたきっかけです。もともとのMITの授業の教科者は、Oppenheimの“Signals & Systems”であり、それをベースにしたLecture Noteはよくできています。また、CMSでの公衆送信における著作権の問題も考慮して、OCWのLecture Noteを使っています。

Moodleでは、毎回の授業に使う英語のLecture Noteを提示しています。これにより受講生に予習を促しています。また、毎回の授業で、Moodleの「投票」という機能を使って、授業理解のアンケートを取っています。

また、毎回の授業後に期限を、1週間としてMoodleの「小テスト」を利用して設問を行っています。これにより、受講生は自分の理解度のチェックができますし、私の方も、受講生の理解度のチェックができます。

5. CMSとしてのMoodle

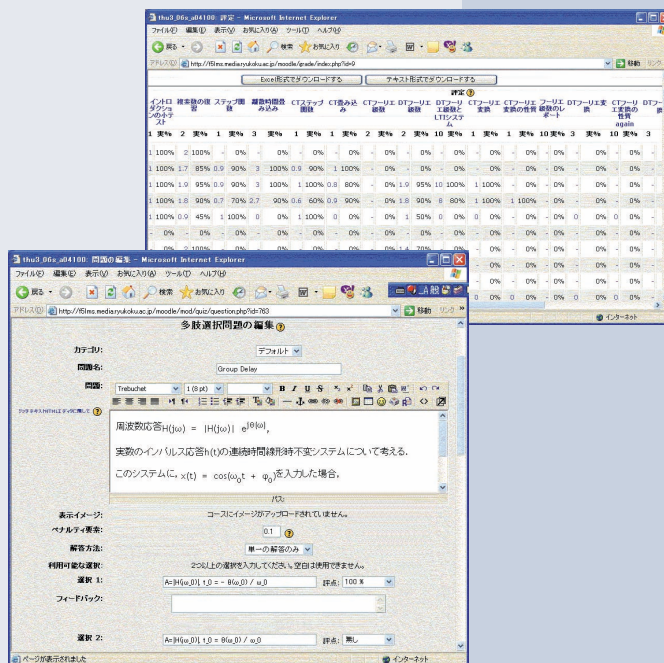
前任校で使っていたBlackboardと比較して、Moodleの方が私にはあっているように思います。また、Moodleには、三重大学で作られたマニュアルや、“Using Moodle”や“Moodle入門”という書籍があり、便利です。私は、“Using Moodle”という書籍を見ながら、Moodleを使っています。「小テスト」などを作成するときなどオプションが多くて悩むこともありましたが、とりあえず、デフォルトのまま使ってみるというスタンスでいいのではないかと思います。「小テスト」で多岐選択問題などを使ってみると、その便利さが実感できます。特に、選択する回答等をシャッフルしてくれるところなどが、気に入っています。

また、「小テスト」などの回答とその自動採点結果の一覧を、「評点」で見ることができて、とても便利です。

6. CMSの授業以外での利用

CMSを、三重大学のように学生Portalとして運用して、シラバスの提供、学生への連絡、レポートの提出などに利用すべきであると思います。そして、教育内容の社会への公開という観点からは、ゲストでのログインを一部認めて、シラバスや教材などを、高校生や高校の先生方、OB、社会人の方に公開するというのも必要であると思います。また、高大連携という観点からも、大学の授業公開につながりますし、入学前教育での反復学習的なものにも、Moodleは利用できると思います。

また、ISMS14001やISMSなどの講習にも利用できると思います。



参 考

- 三重大学学生Portal <https://portal.mie-u.ac.jp/>
- Moodleマニュアル (三重大学) <https://portal.mie-u.ac.jp/moodletext/>
- 奥村晴彦先生のHP <http://oku.edu.mie-u.ac.jp/okumura/linux/?Moodle/>
- Jason Cole: “Using Moodle”, O'Reilly (ISBN 0-596-00863-5)
- 井上博樹, 奥村晴彦, 中田平: “Moodle入門”, 海文堂 (ISBN 4-303-73473-X)

- バーチャル・ユニバーシティ研究フォーラム発行人: “バーチャル・ユニバーシティ”, アルク (ISBN 4-7574-0343-7)
- 文部科学省メディア教育開発センター: “教育メディア科学”, (ISBN 4-274-07934-1)
- 青山学院大学総合研究所AML II プロジェクト: “eラーニング実践法”, オーム社 (ISBN 4-274-07956-2)
- 池田輝政, 戸田山和久, 近田正博, 中井俊樹: “成長するティップス先生”, 玉川大学出版部 (ISBN 4-472-30257-8)

Faculty Development 活動紹介

教育改善のために様々な取り組みが行われています。

文学部

「文学部教育改革のためのアンケート」 集計結果について

文学部助教授 長谷川 岳史

文学部では、2005年10月に2年次以上の学生に対して「文学部教育改革のためのアンケート」を実施しました。これは文学部が教育改革に取り組むにあたって、まず、学生がどんなことを考えているのかを把握するというねらいがありました。このアンケートの集計結果は各学科専攻の教務委員が分析し、すでに文学部教務委員会と文学部教授会では、今後の教育改革にこの集計結果を活用していくことを確認しています。私は仏教学科の教務委員ですので、ここに私が提出した分析の一部を紹介します。

仏教学科の集計結果について

主な問題点

- ①学科に対する関心が低い。
- ②履修内容に対する関心が低い。
- ③体系的な科目履修ができていない（時間割構成の問題も含む）。
- ④①～③が連鎖して、カリキュラムの満足度が低い学生や自分の学科を他人に奨められない学生、関心よりも難易度を優先する学生を多く生み出している。

改善策

- ①1・2年次基礎演習から3・4年次演習への移行が学生の学力や意識の向上につながるよう各年次の演習の位置づけを明確にする。また演習間の不公平感をなくすよう各種演習担当教員全員の意思疎通・情報交換を強化する（これまでの反省点は、基礎演習の位置づけが必ずしも明確ではなく、学生への説明や学科内での意思疎通が十分に行われていなかったこと）。2006年度からは各演習科目の成績評価基準の統一（一部未整備）をはかる。また1・2年次基礎演習担当者会議を組織し、教授内容・方法の検討、問題点の共有・検討、学生情報の共有を図り、学年末には前任者と

後任者の引継ぎを行う。3・4年次演習についても同様で、上記のことがすでに学科内で合意されている。特に不登校学生・長期欠席者・様々な問題を抱えている学生へのケアが学科としてどこまでできるのが課題。

- ②体系的な科目履修が可能であることを学生に明示するため、現行カリキュラムの各科目群の意味づけを明確にし、非常勤講師も含めた全教員に周知する。また、学生の受講動向を把握し、マット内の適切な時間帯に科目を配置する。
- ③所属した演習担当教員の専門分野によって学生の興味関心（特に卒論のテーマ設定）が過度に制約されないよう、オフィスアワー等を利用した緩やかな学科内副指導制も考えている。卒論の質や執筆に関するマナーの低下は学生だけの責任ではない。

文学部全体の集計結果について

- ①学科専攻の必修単位数は、卒業要件単位124単位中の44単位でしかない。他に仏教の思想4単位、外国語科目12単位、プログラム科目16単位の計32単位が必修であるが、選択専攻科目24単位、フリーゾーン24単位の計48単位は、学生自身が組み立てている（この部分の比重が一番多いことになる）。学生がどのような構成で卒業要件単位を満たしているのか現状を把握し、最低でも各学科専攻のカリキュラムを総合すると「文学部のカリキュラム」といったものに成りうるのかチェックする必要がある。また、入試に学科専攻間併願が導入されていることを考えると、入試形態に合わせたメジャーマイナー制や、学科専攻・共同開講科目の枠を超えた副指導制の導入などを模索してみてもよいのではないか。
- ②セメスター制導入を期待する学生が60%近くいる結果をどうみるか。「なぜセメスターの方がよいと思いますか」という自由記述欄を設けるべきであった。あるいは今後セメスター制導入に関するアンケートを行ってみるのもよいかもしれない。
- ③大学院進学については、約半数の学生の脳裏をよぎっている。就職や経済的事情で断念する学生も多いのであろうが、学部から大学院をつなぐパイプの整備（〈4年（L）・6年（LM）・9年（LMD）〉という枠）は必要。

「学科専攻がたくさんあって意見がまとまらない」という文学部得意の逃げ口上がありますが、これが通用する時代は終わりました。学生に依存したアンケートを行って、何かやっているように見せ掛けることも通用しなくなっています。となると次に問われるのは教員です。このアンケートを「あの文学部が動く」原動力にしなければなりません。

理 工 学 部

理工学部におけるFDの取り組み

理工学部教授 林 久夫

理工系の学部は評価に対する社会的な要請が強いことや、評価に馴染みやすい学問分野であるなどの理由から、明確な基準に基づく教育評価の必要性が早くから指摘されてきました。そのために組織されたのが日本技術者教育認定機構（通称JABEE）です。設立以来、ここ2, 3年の間に急速に普及し、理工系学部のFDと言えばまずJABEEと言われるほどこの分野では有名になりました。

JABEE以外でも大学や大学院に適用される基準には、技術者教育に限って言えば、かなり明瞭な共通性が認められます。例えば、今年度本学が受審した大学基準協会による審査基準や、来年度から施行される大学院の新設置基準などにも、その背景には共通の方法論が見られます。すなわち、Plan-Do-Check-ActionのPDCAサイクル、あるいは、①明確な学習・教育目標を設定し、②それを効果的な方法で実行し、③その達成度を客観的な基準に基づき評価し、④改善のために必要な方策を講じるというスパイラルアップの考え方です。

この手法は現在のところ、理工系の教育改善モデルとしては最も信頼のおけるものと考えられています。理工学部のFDも、したがって、基本的にはこの方法論に沿う形で実行されてきました。以下にここ1, 2年の活動例をご紹介します。

①明確な学習・教育目標の設定

【学習会による外部の意見聴取】 学習・教育目標を設定するに当たっては、学内での議論はもとより、社会や卒業生の意見に耳を傾けることも重要です。2007年度からのカリキュラム改革の議論の口火を切るため、学外の講師による講演会を開催しました。Good Practice (GP) 等で教育改善の先駆的な役割を果たしておられる講師を招いて、合計6回開催されました。全学的なテーマに関してはFDセンターで種々の講演会を実施しておられますが、理工に特化した話を聞いたのは有意義であり、また勇気付けられもしました。

【修了生・企業からの意見聴取】 以前実施した卒業生お

よびその就職先に対する調査に続いて、2006年度には大学院修了生およびその就職先に対してアンケート調査を行いました。これによって現在の教育プログラムの長所・短所が浮き彫りになり、今後の大学院改革を進める上での貴重な基礎資料を得ることができました。

②効果的な教育方法の開発・学習支援

【チュータールームの開設】 科目別に対応するチューターに加え、チューターが常駐する「チューター室」を開設し、低年次生を中心とした学習支援体制を整えました。瀬田学舎で開設された「ライティングセンター」とともに基礎学力の向上を目的としています。どちらももう少し便利な場所に部屋を確保することができれば利用者はもっと増えることでしょう。

【少人数セミナーによる導入教育】 ほとんどの学科が初年次に入門科目を開講して、少人数による person-to-person 教育を実施しています。大学生入門と同時に専門教育への導入の役割も果たしています。2006年度にはこの内容を学内外に紹介するため「導入教育事例報告集」を刊行しました。高校訪問やオープンキャンパスなどの機会に、有効に利用したいと思っています。

③教育の自己点検と学生へのフィードバック

【授業自己点検報告書による学生への説明】 学生による授業アンケート調査は毎学期全学的に実施されていますが、その結果の活用はこれからの大きな課題です。理工学部では、教育を改善し、学生への説明責任を果たすため、各教員が「授業自己点検報告書」を全ての専門科目について作成することになりました。報告書は基本的には自由記述とし、授業アンケート結果を始め、シラバス・出席率・辞退率・学生の反応・試験結果・合格率等を参考にして、教員による自己点検や学生に対するコメントを書くようになっていきます。内容は教職員および学生に開示されますので、学生への説明責任を果たすとともに、教員間のピア・レビューの資料にもなります。

以上にご紹介した活動以外にも、学部や学科単位で様々な教育改善の努力が続けられています。よりよい教育を目指すためには、教員個人個人の努力が重要なのは論を待ちませんが、それに加えて、組織的で体系立った教育を推進していくことも必要です。そのためには本来の意味でのFD、すなわち組織としての Faculty（教授団、学部）の Development（開発）が必要であると思います。理工学部としても、今後も社会の要請に耳を傾けながら、地道に足元を固める努力を続けたいと思っています。

【訂正とお詫び】 大学教育開発センター通信Vo.13 9頁右欄1行目
誤 正
「…原稿用紙のなど…」 → 「…原稿用紙の使い方など…」

学生による授業評価調査（授業アンケート）

龍谷大学では、2006年度第1学期の「学生による授業評価調査（授業アンケート）」を以下のとおり実施しました。

■対象科目 2006年度 第1学期開講の講義科目及び外国語科目
（ただし、演習・講読・実験・実習・実技・実習・大学院科目、大学院との合併科目、留学生別科科目は除く）

■実施期間 2006年7月3日（月）～7月15日（土）

その集計結果（全学集計）については、既にWebで学内に公表していますが、ここでは、第1学期の実施状況、学部別回答者数、及び全学の授業評価調査回答集計表（講義科目・外国語科目）を掲載いたします。
（詳しくは、http://www.ryukoku.ac.jp/fd/2006_questionnaire.htmlをご覧ください。学内の端末からのみ閲覧できます。）

◆2006年 第1学期実施状況表

科 目	講義科目	外国語科目	計
対象科目数	901	841	1,742
実施科目数	781	722	1,503
回答者数	53,766	18,468	72,234
受講登録者数	112,056	26,198	138,254
実施率※1	86.7%	85.9%	86.3%
回答率※2	48.0%	70.5%	52.2%

※1 実施率は、調査対象科目数に対し、どれだけ実施されたかという割合を示します。【実施科目数÷対象科目数】

※2 回答率は、調査が実施された科目の受講登録者数（科目によって多少の誤差があり得ます）に対し、どれだけだけの学生が調査に回答したのかという割合を示します。【回答者数÷受講登録者数】

◆学部別回答者数

所 属	講義科目 回答者数	外国語科目 回答者数	回答者合計
文 学 部	6,912	4,101	11,013
経 済 学 部	6,345	2,854	9,199
経 営 学 部	5,801	2,805	8,606
法 学 部	6,297	2,604	8,901
理 工 学 部	10,048	1,876	11,924
社 会 学 部	9,432	2,234	11,666
国際文化学部	6,616	1,864	8,480
短期大学部	1,765	6	1,771
無 回 答	550	124	674
合 計	53,766	18,468	72,234

◆授業評価調査回答集計表

（1）講義科目（全学） ①受講登録者数 112,056人 ②回答者数 53,766人 ③回答率 48.0%

アンケート内容		① 強く思う	② そう思う	③ どちらでもない	④ そう思わない	⑤ 全く思わない	⑥ 回答できない	⑦ 無回答	講義科目 全学平均
Q1	あなたはこの授業にどの程度出席していますか。	22,472	17,028	4,150	855	539	0	8,722	4.3
Q2	あなたは意欲的にこの授業を受講しましたか。	11,715	22,442	13,980	3,841	1,417	260	111	3.7
Q3	この授業はシラバスにそって計画的に進められていましたか。	8,749	23,209	14,967	1,780	673	4,181	207	3.8
Q4	この授業で教員の話し方は明瞭で聞き取りやすかったですか。	11,986	20,522	13,097	5,451	2,207	320	183	3.7
Q5	教員はわかりやすい授業をする努力をしていましたか。	11,834	21,327	14,166	4,033	1,729	459	218	3.7
Q6	授業内容について質問できる機会を設けていましたか。	9,134	17,932	18,229	5,701	1,884	620	266	3.5
Q7	あなたにとって授業内容の難易度は適切だったと思いますか。	7,146	19,296	18,574	5,775	2,097	609	269	3.4
Q8	あなたはこの授業を十分理解できましたか。	6,289	18,419	18,119	7,521	2,703	467	248	3.3
Q9	あなたはこの授業を受講して満足しましたか。	10,456	18,574	16,224	5,011	2,802	516	183	3.5

（2）外国語科目（全学） ①受講登録者数 26,198人 ②回答者数 18,468人 ③回答率 70.5%

アンケート内容		① 強く思う	② そう思う	③ どちらでもない	④ そう思わない	⑤ 全く思わない	⑥ 回答できない	⑦ 無回答	講義科目 全学平均
Q1	あなたはこの授業にどの程度出席していますか。	7,761	6,673	1,130	62	24	0	2,818	4.4
Q2	あなたは意欲的にこの授業を受講しましたか。	4,435	8,365	4,332	950	282	63	41	3.9
Q3	この授業はシラバスにそって計画的に進められていましたか。	3,299	8,429	4,598	472	157	1,452	61	3.8
Q4	この授業で教員の話し方は明瞭で聞き取りやすかったですか。	4,756	8,182	3,953	1,098	367	62	50	3.9
Q5	教員はわかりやすい授業をする努力をしていましたか。	5,004	8,307	3,949	755	297	103	53	3.9
Q6	授業内容について質問できる機会を設けていましたか。	4,166	7,603	5,251	986	289	100	73	3.8
Q7	あなたにとって授業内容の難易度は適切だったと思いますか。	2,758	7,284	5,609	2,057	606	76	78	3.5
Q8	あなたはこの授業を十分理解できましたか。	2,672	7,396	5,860	1,869	510	87	74	3.5
Q9	あなたはこの授業を受講して満足しましたか。	3,843	7,063	5,458	1,326	610	116	52	3.7

■補足

- 回答されたアンケートの平均得点は、各回答の得点をアンケートの内容①の人数×5点、②の人数×4点、③の人数×3点、④の人数×2点、⑤の人数×1点、⑥の得点と⑦の得点は0で加重平均しています。なお、「⑥回答できない」と「⑦無回答」は対象件数に含まれていません。
- 無回答は、重複マーク、マーク未記入のデータです。
- 受講登録者数は、2006年8月末日現在のデータで履修辞退者を反映していません。
- Q1の回答選択肢の内容は次のとおりです。
①毎回出席 ②ほぼ毎回出席 ③半分以上出席 ④半分以下の出席 ⑤たまに出席

《教員対象》パソコン講習会開催

教員のパソコンスキルの向上を目的とした「パソコン講習会」を深草学舎で開催いたします。参加費は無料です。まだお申し込みでない方はぜひご参加ください。

コース名・講習目標・講習内容	講習日時	講習場所	募集定員
● コンピュータ基本操作講習 【講習目標】 コンピュータに慣れる 【講習内容】 ●入力（1コマ目）……タイピングソフトを用いたキーボード入力練習、Web検索（リンク、キーワード検索） ●Wordを用いた基本操作（2コマ目）……文書作成のための一連操作（入力、書式設定、印刷、保存等） ●Excelを用いた基本操作（3コマ目）……文字入力の基本・保存・数式と便利な機能・表示形式・罫線・文字の装飾・書体の変更・印刷方法 ●Windows操作基本（3コマ目）……ドライブへの保存やファイルの削除とコピー、フォルダ作成	2月14日（水） 2・3・4講時	深草学舎 5号館 402教室	各コース 30名
● MS Word（活用編）講習 【講習目標】 統一されたスタイルの原稿作りとWord画面を見せる工夫 【講習内容】 ●スタイルを用いた文書作成……スタイル設定、ス	2月15日（木） 2・3講時		
● MS Excel（活用編）講習 【講習目標】 試験の採点と採点データのまとめ 【講習内容】 ●試験の採点……計算、関数	2月21日（水） 2・3講時		
● PowerPoint講習 【講習目標】 プロジェクターやスクリーンに投影するための効果的なスライドを作成 【講習内容】 ●基本操作……スライド作成、アニメーション設定、デザインの適用 ●スライドを効果的に見せるためのアニメーションの設定、URLのリンク設定、サンプル動画の貼り込みなど ●ナレーション吹き込み ●提示画面への切り替え……スライドショーの実行 ●印刷……配布資料用としての印刷方法	2月22日（木） 2・3・4講時		

- 講習対象者／本学教育職員（非常勤講師可） ※2講時／10:45～12:15 3講時／13:15～14:45 4講時／15:00～16:30
 ■ 講習担当者／情報メディアセンタースタッフ等
 ■ 申込締切／2007年2月9日（金） いずれも申込先着順
 ■ 申込方法／①希望するコース ②氏名 ③所属学部（非常勤はその旨） ④連絡先（電話・E-mailアドレス等）
 ⑤「Dreamアカウント」の有無（情報処理実習室を利用される際に必要なアカウントです。無い場合は発行いたします。）をお知らせください。
 ■ 申 込 先／大学教育開発センター事務部（内線1050、1051／DCHE@rnoc.fks.ryukoku.ac.jp）
 ※すでに定員に達している場合はお申し込みができませんので、ご了承ください。
 ※なお、飛び入り参加は出来ませんので、事前に必ずお申し込みください。

活動報告（7月31日以降）

- ◆学生による授業評価調査（授業アンケート）実施
 （12月18日～1月15日：全学部）
 （12月11日～1月15日：短期大学部）

- ◆FDフォーラム実施
 第2回龍谷大学FDフォーラム（12月2日）
 基調講演：「授業評価と大学改革 ～評価文化を基礎とした大学教育の発展～」
 川口昭彦（大学評価・学位授与機構理事）
 シンポジウム：「授業評価と大学改革とのあり方」
 圓月勝博（同志社大学教育開発センター所長）
 大塚雄作（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）
 宇佐見義尚（亜細亜大学経済学部助教授）
 川口昭彦（大学評価・学位授与機構理事）

- ◆FDサロン実施
 第2回：11月10日
 話題提供者：松谷徳八（経済学部助教授）
 話 題：「学生の勉学意欲を高めるための視聴覚教育法について」
 ◆公開授業と講評会実施
 （12月15日・中川孝博法学部教授）
 （12月21日・樋口三郎理工学部講師）
 ◆教員対象パソコン講習会実施（9月7日・8日・11日）
 ◆大学教育開発センター通信 第13号発行（7月31日）
 ◆大学教育開発センターNews発行
 No.2006-12（9月11日） No.2006-13（9月13日）
 No.2006-14（10月2日） No.2006-15（10月26日）
 No.2006-16（11月14日） No.2006-17（11月28日）
 No.2006-18（12月11日） No.2006-19（1月11日）
 No.2006-20（1月16日）

◇機能推進プロジェクト開催状況

- FD・教材等研究開発検討プロジェクト
 第3回「2007年度自己応募プロジェクト申請採択について」（11月2日）
 ■教育活動評価支援プロジェクト
 第4回「第2学期学生による授業評価調査（授業アンケート）の実施について」（11月10日）

- 交流研修・教育活動研究開発プロジェクト
 第1回 FDフォーラム実行委員会「第2回龍谷大学FDフォーラム実行委員長選出、及び運営等について」（8月4日）
 第2回 FDフォーラム実行委員会「第2回龍谷大学FDフォーラム運営及び実施について」（10月24日）
 第3回 FDフォーラム実行委員会「第2回龍谷大学FDフォーラム運営及び実施について」（11月28日）

2006年度 指定プロジェクト・自己応募プロジェクト研究報告会

以下の日程で研究報告会を開催いたします。参加申し込みの必要はございません。
関心のあるテーマのみ参加していただいても結構です。
みなさまの積極的なご参加をお待ちしております。

開催日時 2007年3月13日(火) 13:00～(詳細が決定次第別途お知らせします。)

場 所 深草学舎 21号館 403・404・405・406・407・408教室

発 表 者 2006年度 指定プロジェクトメンバー(全2プロジェクト)
2006年度 自己応募プロジェクトメンバー(全10プロジェクト)



2005年度指定プロジェクト・自己応募プロジェクト研究報告会の様子。

【短期大学部主催】2006年度現代GPシンポジウム

短期大学部のキャリア教育に関する取組の実施内容や成果等について社会に対して公表するとともに、社会からの反応を受け止める機会として、次のとおりシンポジウムを行います。
参加申し込みの必要はございません。みなさまの積極的なご参加をお待ちしております。

◆テ ー マ 「イメージ創生を中心としたキャリア教育」

—視聴覚教材・学外教育資源・体験型学習を活用した体型的教育プログラム—

◆開催日時 2007年3月2日(金) 13:00～14:30 ◆場所 深草学舎 21号館 6階 604教室

ふるって
ご参加ください。

※詳細は教学部(短期大学部担当)へお問い合わせください。

(財)大学コンソーシアム京都 第12回FDフォーラム

◆テ ー マ 「学生が伸びる大学教育」

◆開催日時・場所

1日目 2007年3月3日(土) 13:00～17:00 京都産業大学 神山ホール

2日目 2007年3月4日(日) 10:00～15:30 キャンパスプラザ京都

◆申込方法

大学教育開発センターでお申し込みの取りまとめは行いません。

各自で『申込フォーム』(<http://www.consortium.or.jp/fd-cgi/index.html>)からお申し込みください。

◆申込締切 2007年2月10日(土)

◆参 加 費

フォーラム参加費 3,000円 情報交換会参加費 2,000円

※ただし、専任教職員につきましてはフォーラム参加費(3,000円)を大学教育開発センター事務部で負担いたします。フォーラム当日、受付にて参加費をお支払いの際に領収証をお受け取りいただき、3月16日(金)までに大学教育開発センター事務部へご提出ください。後日、3,000円をお振り込みいたします。なお、情報交換会参加費と交通費は自己負担となります。

※詳細については、大学コンソーシアム京都のWebをご覧ください。<http://www.consortium.or.jp/consortium/fd/fdindex.html>

※なお、2日目の分科会は応募多数の場合、ご希望にそえない場合があります。あらかじめご了承ください。

17:15より
情報交換会

新着図書

大学教育開発センターでは、センターの資料として図書を購入しています。貸し出しもしていますので、どうぞご利用ください。また、購入図書の希望も募っていますので、ご希望があればお知らせください。

書 籍 名…シリーズ教養教育改革ドキュメント2 ICU<リベラル・アーツ>のすべて
著 者 名…絹川 正吉
出版社名…東信堂

書 籍 名…SD(スタッフ・ディベロップメント)が支える強い大学づくり
大学職員は何を学び、それをどう生かすか?—筑波大学大学研究センター短期集中公開研究会より

著 者 名…山本 真一
出版社名…文芸社

書 籍 名…原点に立ち返っての大学改革
著 者 名…館 昭
出版社名…東信堂



書 籍 名…大学教育の思想
—学士課程教育のデザイン
著 者 名…絹川 正吉
出版社名…東信堂

書 籍 名…大学行政論 I
著 者 名…川本 八郎/近森 節子
出版社名…東信堂

書 籍 名…大学行政論 II
著 者 名…川本 八郎/伊藤 昇
出版社名…東信堂

書 籍 名…大学評価・学位授与機構大学評価シリーズ
大学評価文化の展開
—わかりやすい大学評価の技法

著 者 名…川口 昭彦
出版社名…ぎょうせい

